

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準	自己評価		学校関係者評価		改善策			
						達成	状況	評価	評価				
①学習指導	確かな学力の育成	生徒が主体的に学習に取り組む態度を高めるために、わかる授業を展開する。授業内容によっては、TT指導や支援員の効果的な活用により、きめ細かな指導を実施する。 また、教材研究に努め、ワークシートや資料の工夫、ICT教育機器の有効な活用を図る。 家庭学習の充実を図るために課題やプリント・副教材の演習問題など積極的に提示し、実施の有無の確認や評価及び主体的に取り組むための支援に必ず取り組む。	生徒が主体的に学習に取り組むことができ、わかる授業づくりに取り組む。TT指導や支援員の積極的な活用と授業教材やICT教育機器の有効活用を取り入れる。	最初に「めあて」を提示して授業に臨み、説明を聞く場面、知識・技能を習得する場面、思考する場面、表現や発表する場面を明確にし、生徒が授業で、知識・技能を習得し、思考・判断・表現する力を育成する。授業の終わりでは「自己の振り返り」を行うことで、学びの成果を実感させ、学んだことや意欲・問題意識等につなげ、家庭学習や次時の授業につなげていく。	A 生徒が主体的に学習に取り組み、わかりやすい授業が展開されるとともに、学級全体が学習へ向かう態度が向上し、生徒の自己学習力が向上している。	B 工夫されたわかる授業が展開され、思考・判断・表現する力を育成する場面では、生徒は意欲的に授業に取り組んでいる。	C 工夫されたわかる授業が展開され、聞く・考える・表現する場面では、生徒はそれに従って落ち着いて授業に取り組んでいる。	D 授業への取組に個人差が見られ、集中力に欠ける生徒が見られる。	生徒による学校評価で、授業に入る前に本時の「めあて・目標」が明示されているか、という問いに対して「思う」が73%、「やや思うが」22%であった。また授業の振り返りを行っているか、という問いに対して「思う」が55%、「やや思う」が38%であった。「めあて・目標」の明示は定着してきたようだが、振り返りの充実はまだ不十分である。また、生徒による主体的な学びの場(話し合い・深め合い)があるかという問いに対して、「思う」という回答は55%にとどまっている。今後は、教師による一方的な教授スタイルだけでなく、授業のねらいに迫るための主体的・対話的で深い学びの実践および授業改善が求められる。そのためのツールとしてICTを取り入れることや、協調学習やそれに類似した学習形態を実践していく必要がある。	B	生徒の授業前の「めあて・目標」については定着していることが伺え、先生方の工夫や努力の成果だと思う。一方、「振り返り」についてあまり定着していないと感じる。「振り返り」は学んだ事を頭の中で整理し、定着させることによって学力向上を図っていくために重要である。今後は、新たな授業スタイルの実施、新たなツールの導入等を考え、より一層工夫を凝らした授業展開を模索していただきたい。また、振り返りの方法として、生徒が考えやすい質問や対話形式にすることも視野に入れていただきたい。 生徒の評価の「生徒による主体的な学びの場が授業に取り入れられていると思う」との肯定的な回答が少ないことも気になる。生徒は決められた目標に対して自主的に学ぶことはできると思う。今後は、生徒の主体性を伸ばすための授業展開の創意工夫をお願いしたい。 これらによって、ますます生徒の学習意欲の向上と学力向上に繋がっていくのではないかと思います。	B	学校評価の結果を受けて考えられる授業改善の主たるねらいとして、「振り返りの充実」「協調学習またはそれに類似した授業実践」「学習のねらいに迫るためのICT活用」が考えられる。 令和6年度は、上記3点を実現させるため、研究部と連携を図りながら校内研究の柱として位置付けたい。また、そのためにどのような取組ができるか、またどのような研修が必要かについても併せて研究部と検討する時間を確保したい。
			学力向上につながる家庭学習の充実を図るために、各教科で示された学習の取り組み方や家庭学習の方法をもとに、家庭学習への意識を高める。また、生徒が積極的に家庭学習に取り組めるように各学年および各教科で家庭学習課題の提示と確認・評価をしつつ、個に応じた課題提示の工夫をする。	学力向上を図るための家庭学習を習慣化させる。 ①各教科の家庭学習課題を提示する。 ②各学年の実態に応じた自学ノートの取組の充実を図る。 ③定期・習熟度テストへの家庭学習取組表の実施を行う。 ④家庭学習調査を行い、毎日の学習時間目標を平均90分以上とする。ただし、テスト期間中は120分以上をめざす。	A 各教科担任および各学年で家庭学習課題の提示と確認・評価を継続して行い、家庭学習習慣が定着している。(平日90分超、テスト期間120分超)	B 家庭学習の提示と確認・評価を継続して行い、生徒の家庭学習時間にバラツキがあるが、全体としては家庭学習が習慣化している。(平日60分超、テスト期間90分以上)	C 家庭学習の定着が不十分であり、全体として家庭学習が停滞傾向である。(平日60分未満、テスト期間90分未満)	D 家庭学習の重要性を意識せず、全体として家庭学習時間が不足しており、習慣化にはほど遠い。(テスト期間でさえ60分未満)	生徒による学校評価で、「毎日家庭学習をしているか」という問いに対しては、学年によって回答に差が生じている。学校全体としては、「思う」「やや思う」という肯定的な回答が約71%という結果であった。 平日の家庭学習時間は個人によってバラツキがあるが、テスト前の家庭学習時間は全学年で平日120分間程度確保できている。また、全学年において家庭学習で何に取り組んだかを用品に記録し、毎朝担任に提出している。ただ、提出状況は学年やクラスによって差があるため、今後は取組の趣旨等が分かったうえで学習に取り組めるような、伝達方法の工夫が必要だと思われる。定期テスト前は学年の実態に応じて「学習計画表」を作成し、学習内容や課題の進捗直状況が分かるようにしている。	B	生徒の家庭学習について、学校全体では習慣化していることはよいが、学年や個人でのばらつきがある。これまでは毎年2年生の学習時間の少なさが目についていたが、今年は3年生の数値の低さが気になる。特に高校進学を三カ月前に控えたこの時期の数値では少々心配になる。 家庭学習の取組の平準化に向けて、今年度取り組んでいる毎朝の家庭学習の内容の用紙提出や「学習計画表」の作成などの取組を継続させるとともに、生徒に今、自分には何が必要か、家庭学習とどのように向き合うべきか、どれだけ効率的に集中して取り組めたかなどを考えさせることも必要ではないかと感じる。	B	「家庭学習に関するファイル」および定期テスト前の「学習計画表」の記入・提出については、来年度も継続して実施したい。 家庭学習については、「何をしたらよいかわからない」という声も一定数あることから、来年度は学年の実態に応じて、家庭学習の内容を学級あるいは学年で共有できるような取組を提案したい。
人権・同和教育の推進	一人一人が認められ、差別や偏見を許さない人権感覚と実践力を養い、安心して活動ができる学校をつくる。	自他の人権を尊重し「差別をしない生き方」ができる力を育てるために、人権集会や人権講演会等を通して、生徒が考える場を設定する。	身近な生活の問題から、自分や周囲の人の人権について考える時間を設定する。 学習テーマは、生徒の実態に応じて設定し、意見交換をする場を設ける。 日常の生徒の様子に応じた指導、助言をする。	A 人権集会や人権講演会等を通して、生徒が一人一人を大切にすることはどうしたことか、そのためには自分はどうしたらよいか考え、意識して行動する。	B 人権集会や人権講演会等を計画的に実施し、生徒が人権について考える。	C 人権集会や人権講演会等を実施するが、内容が生徒の実態と合わない。	D 人権集会や人権講演会等、人権について考える機会が設定できない。	令和3年度と令和4年度は「性の多様性」について学習したが、今年度は部落差別問題をテーマに選んだ。中学校3年間の中で部落差別について学ぶ場を設定し、正しい知識を身につけてほしいと考えたからである。人権講演会講師の選定については、江津市人権センターと連携し、徳島県在住の大湾昇さんに依頼した。同和問題については社会科の歴史的分野で学習するが、まだ授業で取り扱っていない学年もあるため、『同和問題の歴史』(島根県教育委員会・島根県作成)の資料を活用して、各学級・学年で講演会の事前学習を行った。人権講演会では、「あることをないことにしない」という演題で、大湾さんが心理クイズなどを取り入れながら話をされ、生徒は関心をもちながら真剣に聴いていた。大湾さんや話の中に出てきた方々の感情を想像したり行動に共感したりしながら話を聴くことができた。講演会後のふり返りでは、「自分のこれまでの言動が相手を傷つけてしまっていたのではないか。これからは言葉を使う時にも相手の気持ちに配慮していきたい。」と多くの生徒が書いていた。自分の家族や友達との関係を見直していこうとする考えや、これまでは自分のことが好きではなかったけれど自分の良いところを見つけていきたいという考えをもった生徒もいた。このように、自分について考えたり、自分と周囲の人たちとの関係について見直したりする、貴重な機会となった。また、これからの生き方として、どんな人になりたいか、どんな行動をしていきたいかについて考えた生徒も多く、「自分は差別をする人ではなくて、弱い立場の人を助けることができる人になりたい。」「差別をなくすために自分ができたいことをしたい。」「正しい知識を身につけ、正しい判断や行動ができる人になりたい。」と書いていた。部落差別問題についても関心をもった生徒が多く、今後も社会科以外でも学ぶ機会をつくることでさらに理解を深めることができると思われる。	B	人権講演会を通して、生徒たちは、知らないうちに相手を傷つけていたことへの気づきや、他者や身近な人への思いやりの心を育み、自分を客観的に見つめ直す機会になったように見受けられる。今後も、様々な方の話を聞くことで、自分を振り返るきっかけとなり、より自分自身と周囲の人を大切にできたり、自分自身のよいところもどんどん見つけたりしてほしい。	B	今年度は、2月にもジェンダーに関わる問題やセクシャルマイノリティについての理解を深め、多様性を尊重する人権感覚や、一人一人に平等に関わろうとする態度を養うことをねらいとし、講師を佐藤みどりさんをお願いして、人権講演会を行った。来年度も生徒の実態等に応じて学習テーマを設定し、講演会等を実施していきたい。	

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指	評価基準	自己評価		学校関係者評価		改善策
						達成	状況	評価	考察	
① 学習指導	学校図書館・読書活動の推進	多様な価値観に触れ、表現力や想像力を育む読書活動を推進する。	学校図書館利用増をめざして読書推進活動を充実する。	「利用しやすい図書館」として、図書館利用者の増加、家庭での読書の習慣化を図る。教科学習における図書館利用にも一層の活用を推進していく。	<p>A 図書館利用が増加し、自主的な読書が定着（1か月の平均貸出冊数が3冊以上）</p> <p>B 図書館利用が増加し、自主的な読書が定着・習慣化（1か月の平均貸出冊数が2冊以上）</p> <p>C 図書館利用が増加したが、自主的な読書が不十分（1か月の平均貸出冊数が1冊以上）</p> <p>D 図書館利用が増加せず、自主的な読書も不十分（1か月の平均貸出冊数が1冊未満）</p>	<p>入学した1年生に図書館の活用の指導をすることで、自主的な読書の定着に繋がると考え、4月にオリエンテーションで本校図書館の活用方法を指導し、夏休み前には9類の小説を中心とした味見読書、11月末には2類から7類を中心とした味見読書を行った。長期休業前には今年度から全校生徒対象の無制限貸出を実施した。また、図書館司書が図書スペースで生徒が関心をもつように各テーブルごとに展示を工夫した。</p> <p>4月から12月までの貸出では全校生徒一人あたりの平均11冊となった。学年ごとに見ると1年一人あたり平均が23冊、2年一人あたり平均7冊、3年一人あたり平均6冊である。1年は前述した指導や図書ペースが教室に近く行きやすい位置であることが貸出冊数の伸びに繋がったと考える。2・3年は学年が上がるにつれて学業や部活動が忙しくなったり、図書スペースが教室から遠く離れたりしたことが1年に比べ平均冊数が少ない原因だと考える。しかし目標は十分に達していると考え、評価を「A」とした。来年度以降は、教科全体での活用方法を喚起するなど教職員全体での読書活動推進に取り組みたいと考える。</p>	A	<p>今年度は、評価基準を読書時間から貸出冊数に変更したことで、結果が見えやすくなりよかった。また、近年メディアの普及で本離れが進んで、子どもに限らず大人でも読書をする機会が減っている中で、味見読書や長期休業中の無制限貸出しなど、とても素晴らしい取組だと感じる。特に味見読書は、秀逸な取組で、自身の琴線に触れるという経験のきっかけになるとともに、何より抽象的思考力が蓄積できる。これを契機に読書の面白さ・大切さを知り、本が好きになり、自主的に読書をする生徒が増えていけば、なお喜ばしい。</p> <p>併せて、学校司書の方が、少しでも生徒に関心をもってもらえるように、レイアウトなどに工夫を施すなどの環境づくりを行っていることも評価でき、利用しやすい図書館となるように取り組んでいることが伺える。</p> <p>今後は学校の授業でも一層図書館を有効的に活用するような授業展開を模索したり、各階のワークスペースに移動図書館のようなおすすめの本などを期間限定で置いたりする取組ができるとよいのではと考える。</p>	A	メディアの発達により、めまぐるしく多くの情報に触れることが可能となっているが、生徒は興味関心があるものにはしか触れないという傾向も見られる。多様な価値観に触れるチャンスとして、味見読書に限らず図書に触れる機会を増やす授業展開を考えたい。また、学年が上がっても図書に触れるチャンスを増やすため、期間限定の移動図書館の実施を検討したい。
	「個別最適な学び」「協働的な学び」の推進	「つながる力の育成」のために各教科等で、他者と協働しながら学び、考えをより広げ深める授業づくりを取り組み、思考力・判断力・表現力の向上をめざす。	各教科等で、生徒が協働しながら学ぶ授業の題材、展開、指導などの工夫を行う。	<p>各教科等の授業で「個別最適な学び」「協働的な学び」のためにICT機器の活用や「協調学習」の実施をし、生徒が自分の考えを伝え合いながら組み合わせ、より広げたり深めたりするような、よりよい学びをめざす。</p>	<p>A 各教科等で「個別最適な学び」「協働的な学び」のためにICT機器の活用や「協調学習」を実施した。</p> <p>B 各教科等で「個別最適な学び」「協働的な学び」のためにICT機器の活用や「協調学習」を実施した。</p> <p>C 複数の教科等で「個別最適な学び」「協働的な学び」のためにICT機器の活用や「協調学習」を実施した。</p> <p>D 「個別最適な学び」「協働的な学び」のためのICT機器の活用や「協調学習」の実施が不十分だった。</p>	<p>昨年度より引き続き「つながる力の育成」を目指しているが、今年度は「個別最適な学び」と「協働的な学び」を意識した授業を展開するために、「ICT機器の活用」と「協調学習」を取り入れた実践を行ってきた。新しい取組のため、研修を行い教員自身の知識とICT機器の操作技能を高める取組から行うことが必要であった。教職員評価によると、この重点を意識した取組に対する肯定的評価75%であり、校内研究授業等、公開授業でも教師がICT機器を用いて指導したり、ペアやグループなどで協働して学習する場を設けたりすることは当たり前に行われている。また、「協調学習」にも技術、総合的な学習の時間などで実践があり、それを公開し研修を深めた。生徒による学校評価でも、「授業では、学級の友達と話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている。」という項目の肯定的評価は89.6%と高くなっている。しかし、まだ、生徒が自分のタブレットを用いて自分に最適な学びを考えて行ったり、協働的な学びに活用したりする場面は多いとは言えない状況である。</p>	B	<p>教員評価から、つながる力の育成のためにICT機器の活用や協調学習への取組に対する意欲を感じられる。今後は生徒が主体性をもった学習環境や協働学習の創造に向け注力を望む。そのためには、教員がICT機器の操作を熟知し、適切に活用できることが前提になっていることから今後も研鑽に励んでいただきたい。</p> <p>また、ここ数年の話し合い活動の継続した取組によって、生徒自身が他人の考えを尊重しながら、自分の考えを深め、視野を広げつつあるが、生徒一人一人の主体性や対話により深める理解力などは、一朝一夕で成果がでるものではないので、引き続き意欲的な取組をお願いしたい。</p>	B	「ICT機器の活用」についてはスタートが遅かったことから、来年度は、年度初めに、メディアモラル、タブレット使用のルール等の指導も含め、学年部でICT機器を活用した活動を組み、教員も操作、指導をする機会としたい。また、タブレットの家庭学習への活用など積極的に活用させていきたい。話し合い活動には、引き続き力を入れていきたい。その際、相手が理解しやすいように工夫しながら的確に伝えることが苦手であるということを踏まえた活動内容を意識的に取り入れたい。
② ふるさと・キャリア教育	ふるさと・キャリア教育の推進	将来に生きる大きな夢や希望を育む。「江津の明日を創る人」を育てるために、ふるさと・江津に根ざした各種体験活動を核とした取組を推進する。	地域の教育資源（ひと・もの・こと）を有効に活用し、各学年で系統立ったふるさと・キャリア教育を推進する。	<p>各学年で取り組む活動（修学旅行の企業訪問、事業所訪問、起業学習、上級学校調べ、職場体験等）が系統的に、より一層充実するように努める。また、地域の「ひと・もの・こと」を活用することで、地域の魅力や課題の理解を進める。</p>	<p>A 全学年において、ふるさと・キャリア教育の取組を複数回計画的に実施した。</p> <p>B ふるさと・キャリア教育の取組を複数回実施した学年と一回実施した学年があった。</p> <p>C 各学年、ふるさと・キャリア教育の取組を1回実施した。</p> <p>D ふるさと・キャリア教育の取組を実施できなかった。</p>	<p>1年では、学期ごとに地元で働く方のお話を聞く機会を設けたり、地元企業を訪問した。知り得た内容をもとにプレゼンテーションを作成し、発表会を行った。この活動を通じて江津の良さを再確認し、自分の将来と関連させて考えることができた。2年では、今年から新たに「起業学習」を取り入れ、IまたはUターンによって地元江津にこれまでなかった新たな職場を設立して活躍している方の話を聞き、進路選択の1つに起業もあるという新たな認識をもつ機会にした。修学旅行の行程にTOTOミュージアムを加え、あえて大企業について学ぶことで地元の企業の良さについて考える機会を設けた。3学期には上級学校調べを行い、中学校卒業後に学ぶ場についての理解を深める機会とする。3年では、進路説明会を通じ、中学校卒業後の進路選択について上級学校の先生方のお話を実際に聞くことで、より関心を深めることができた。また、2学期には市内のさまざまな事業所の協力を得て職場体験を行った。地域の方々のお話を聞いたり、実際に自分で体験したりすることで、今後の生き方を考える機会となったことに加え、ふるさと江津の「ひと・もの・こと」のよさを再認識することができた。</p>	B	<p>生徒にふるさと江津のよさ・素晴らしさを認識してもらうため、地域の方を招いた講演や、地元の企業見学や職場体験、地元で起業された方の話を伺うなど、一年を通じた一体化した取組は大変評価できる。</p> <p>本年度からは外部団体と協同し、職場体験の事業所の多種・多様化が図られていることはとても良いことだと思う。私が在籍する職場で本校生徒をはじめ、市内一円の生徒たちを職場体験で受け入れた。そこで一様に感じたのは、質問や意見交換においてとても積極的に発言されたことだった。その内容も明瞭で的確なものだった。仕事の内容を知ること大切だが、第三者の社会人と交流することも、大変貴重な経験や財産になると思う。今後も地域・関係各所と連携しながら取組を継続してほしい。</p> <p>一方、地域ではコミュニティ等が主体となって地域住民と様々な活動を行っているが、中学生が参加しにくい状況にある。地域コミュニティや自治会組織と情報を共有しあい、地域の事業やボランティア活動に生徒が関わっていけるようになればうれしい。</p>	B	年度初めの計画の段階で担当教員が意見を出し合い、どんな活動でどんなことを体験・学ばせたいかを明確にし、年間の計画を立てる必要がある。今現在実施している内容をそのまま次に引き継ぐのではなく、新たに良い活動がないかを検討したい。学校関係者評価にあったように、地域の事業やボランティア活動に生徒が参加できるような機会を盛り込んでいけるように、年度当初に地域コミュニティや自治会組織と情報を共有しあい、可能な限り年間計画に組み込んでいきたい。

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指	評価基準	自己評価		学校関係者評価		改善策	
						達成	状況	評価	考察		
③ 生徒指導	生徒指導の充実	教職員の共通理解・協力体制により、社会規範を遵守する態度を育成する。	望ましい生活習慣の定着とふるまい向上のため、生徒会と連携しながら指導を行う。	生徒会と連携したふるまい向上等を推進し、生徒の基本的な生活習慣、規範意識が向上する。 情報モラルについては、家庭への情報提供し、特に「家庭内の約束」の遵守をめざす。	A	生活習慣、規範意識が向上し、ネットトラブル等が起きない	挨拶、返事、靴揃えを基本とし、年間を通じてさまざまな機会を使って繰り返し指導を行った。挨拶の声はまだ十分ではないが、生徒会本部と生活委員会が継続してあいさつ運動を続けている。靴揃えは習慣になってきており、ほとんどの生徒が意識して揃えていた。身だしなみについては、生徒会生活委員会が行う毎朝の名札チェックや全体への服装指導を行っているが、名札の着用、ボタン・リボンをつけるなどが徹底しきれないところがある。 ネットトラブルについては、昨年より認知件数が減ったが、メディアの接触時間が多い生徒が目につく。また、外部の専門家を招き、学期に1回ずつ情報モラル講演会を実施し、全校生徒のモラル向上を図った。長期休業前には重点的に全校生徒への指導を行い、特に相手のことを考えた行動をすること、一人で抱え込まないことを強調して伝えた。一方、PTA総会等の機会を通じ、保護者に対しても啓発を行った。「スマホ・インターネットの家庭内の約束」が徐々に形骸化し、利用時間が守られないなど保護者の意識はあまり高まっていないことが課題である。	C	挨拶・返事・靴揃えは、学校一丸となって取り組んでいる様子が伺え、定着していることが分かる。学校へ訪問した際には生徒の方から明るい挨拶が返ってくるのが多く、気持ちが良い。さらに、家庭・地域・学校で、大人から気持ちのよい行動(挨拶・返事)のできる環境をつくるという意識も併せてもちたいと感じる。 校外でのマナーについては、評価委員会でも毎回意見が出る。学校外でのことはPTAに協力してもらうことも検討したほうがよい。 ネット利用については、家庭でのルールづくりが形骸化し、守られていない家庭が多く見られ、保護者の意識の低さが目立つ。情報モラル講演会では、講師の方のネットを利用するにあたってのリスクについて重点的に話され、生徒も真剣に聴いていた。引き続きの講演会実施による啓発と知識を、子どもだけでなく、保護者へもお願いしたい。 校則の見直しについては生徒会役員と話し合いながら時代に合った形に臨機応変に変えてよいと思う。	C	生徒心得の見直しについては、生徒と共に考え実行に移すことができたケースを大切に、ケースに応じて引き続き対応していきたい。 情報モラル講演会は引き続き実践できるよう関係機関と連携したい。やはり生徒にとってはLINEが身近であり、オンラインの講師による学習会は効果がより高いと感じるので継続していきたい。
					B	生活習慣、規範意識が向上					
					C	生活習慣、規範意識が向上せず					
					D	生活習慣、規範意識が下降					
④ 健康の増進・体力の向上	学校保健及び食育の推進	学校保健計画に基づいて、生徒の自己健康管理力の向上を図る。また、「食」に関する正しい知識と望ましい食習慣を身につけさせる。	疾病予防等の指導や「食」に関する指導を通して、自己健康管理力の向上と健やかで逞しい心身の育成に努める。	1日のスタートの要となる朝食摂取について、昨年度までの朝食摂取の取組を土台に、朝食の内容の充実を図るための取組を行う。栄養教諭と連携を図り、家庭科や学級活動で指導した内容を長期休業中に家庭で実践する場を設定することで、生徒及び家庭への啓発を行う。	A	積極的な健康管理により、健康に配慮した朝食摂取が定着	夏休みと冬休み中に「朝食チャレンジ」の課題を出した。今年度は「1週間分の朝食の記録を書くこと」、「朝食を自分で、または家族と作ってみること」の2つのチャレンジを設定したが、夏休みは「校長先生・学年主任の先生のおすすめ、簡単朝食レシピ」、冬休みは「栄養教諭の方のおすすめ、作って楽しい元気アップご飯」を紹介し、生徒が取り組みやすくなるよう工夫した。 また、昨年度のアンケートで専門の方のお話を聞きたいという意見もあったので、栄養教諭に依頼し、全員分の夏休み1週間分の朝食の記録をチェックしていただいたり、その結果を受けて、10月の保健委員会において「朝食摂取の大切さ」について生徒に直接お話をさせていただいたりした。そして、栄養教諭から教えていただいた「朝食をとる理由」や「いい朝食のとり方」などを保健委員の生徒でまとめ、掲示物を作成し、全校に発信することができた。冬休み中のチャレンジでは、「同じ食べ物が続かないようにバランスよく食べることができた」、「毎日決まった時間に朝食を摂ることができた」という感想があった一方で、「毎日朝食を食べることができたけど、主菜、副菜がない」、「栄養がかたよっている」という感想も多くみられた。来年度も長期休業中の取組に改善を加えながら、栄養教諭などとも連携し、生徒自身が考え、取り組める内容の工夫をして生活改善やその定着を図っていきたい。	B	「朝食チャレンジ」は、毎年変化をもたせた企画を考えて取り組んでいる。家庭の事情が色々ある中、朝食摂取を習慣づけることができたり、食の大切さや栄養バランスなどを考える機会となったりしている。また、多様なレシピの提供により、調理への興味を喚起するとともに、栄養教諭から朝食摂取の大切さやバランスのよい朝食のとり方などを学習し、生徒の食に対する意識を高める取組を行っている。心身ともに成長期の中学生にとって食に関心をもつことは非常に有意義なことなので、今後も保護者の協力を得て取組を継続してほしい。	B	来年度も引き続き、栄養教諭との連携のもと、食に関する取組を行っていきたい。また、生徒自身が関心をもって取り組むことができるよう、内容も変化をもたせたものとなるようにしていく。
					B	自己の健康管理により、健康に配慮した朝食摂取が習慣化					
					C	自己の健康管理に努力が必要					
					D	健康管理が不十分					
④ 健康の増進・体力の向上	体力の向上	体力向上に係る体育的活動の推進に努め、生涯に渡る健康なライフスタイルづくりを推進する。	運動の合理的で豊かな実践を通して、運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにする。	健康なライフスタイルを確立するため、家庭での健康・体力づくりを行う。体育の授業において保健分野からの指導など授業改善に努めていく。長期休業前には、体力づくりの啓発を行い、家庭との連携を図る。	A	目標を立て計画的に健康・体力づくりを実践	多くの生徒が運動の必要性を理解し、意欲的に運動に取り組む姿勢が見られた。昼休みにも校庭や体育館に集まる生徒が学年問わず多かった。長期休業前は、家庭でも運動を継続するように体育科が中心となって呼びかけた。1日に30分以上運動を実施する生徒が多く見られた。 コロナ禍も過ぎ、マスクを外して元気に運動する生徒の姿が増えてきたが、持久走におけるタイムの低下が目についた。体を動かす時間が増えた分、強度や時間を考えて実施できるように指導していきたい。誰もが進んで運動に取り組めるような工夫を引き続き考え、来年度は目標が達成できるようにしたい。	B	ようやく新型コロナウイルス感染症の終息が見え、昼休みにグラウンドで走り回る生徒の姿をよく見るようになった。 体力の向上に関する取組は、ここ数年に渡って継続的に取り組んでおり定着してきている。本年度は評価基準を1日40分から30分に緩和したことによって生徒も取り組みやすくなったのではないだろうか。生徒自身が必要性を感じ、運動に取り組むことはよいことである。 今後は、犬の散歩なども運動に含まれると思うので、どういった運動内容を行ったのかなどの調査をしてみることも面白い。また、短時間でも効果が上がる体力づくりの事例を示したり、運動の苦手な子でも楽しく取り組めるような選択肢(例えばダンスなど)を設定したりすると、より実践しやすくなると思う。体力づくりとともに良好な人間関係も構築するきっかけになるとさらによいと感じる。	B	保健の授業でも犬の散歩を気晴らしの運動にし、犬との関わりが心の発達に繋がっていると感じている生徒もいた。そのことから生徒の身近にあるものを生徒の心身の発育発達に結び付けられるように、引き続き保健や体育理論の授業を活用して、生徒と共に考えていきたい。
					B	計画的に健康・体力づくりを実践(1日30分以上)					
					C	計画的に健康・体力づくりを実践(1日15分以上)					
					D	健康・体力づくりが不十分(1日10分未満)					

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指	評価基準	自己評価		学校関係者評価		改善策	
						達成	状況	評価	考察		
⑤安全管理・指導	学校安全の推進	安全で安心な危機管理体制の確立に努める。	危機管理マニュアルの改善とともに、毎月安全点検を実施し危険箇所の修理等を迅速に行う。	危機管理マニュアルの見直しと、毎月15日の安全点検を生徒とともに実施・点検し、修繕・修理を迅速に行う。 食物アレルギー対応委員会を組織し、実態と対応を把握する。	A	マニュアル改善、点検・修繕等を迅速に実施し、安全推進	今年度も校舎の多くの箇所破損・故障が見られ、市教委と連携しながら改善・改修を進めている。今後も市教委と連携しながら、速やかな改善・改修に努めたい。また、毎月定期的実施している安全点検では、配膳台や黒板クリーナーの損傷について報告が挙がっている。軽度の損傷であり、逼迫した状況でないため、現在も使用中である。来年度早々にはきちんとした対応を計画している。 今年度も危機管理マニュアルの見直しを図るとともに、養護教諭を中心にSCや栄養教諭と連携を図り、カウンセリングやアレルギー面談の時間を設けて、丁寧に対応するなど安心安全な体制を構築している。	B	校舎・設備等の改善・改修は、生徒の安全のためにも、引き続き市担当課と連携をとり、適切な対応をお願いする。また生徒の協力も得ながらの安全点検を充実していただきたい。定期点検日だけでなく、生徒からは破損や故障を見つけたら速やかに報告できるような体制づくりも検討してほしい。併せて危機管理マニュアルも、様々な場面を想定したり多くの視点から考えたり、臨機応変に見直しを図り、緊急時に即対応できるようにしてほしい。 命に関わるアレルギーをもつ生徒たちに養護教諭を中心に一人一人面談し、丁寧に対応されており、保護者の方との連携を感じる。今後も情報を早期に把握し、保護者や小学校とも連携し、個々に応じたより細かな対応の継続を望む。	B	来年度も引き続き、生徒との安全点検の実施や市教委と連携を図りながら安全対策・危機管理対応を実施していく。また、危機管理マニュアルやアレルギー対応についても細心の注意を図りながら取組をよりよいものにしていく。
					B	マニュアルの改善、点検・修繕等を迅速に実施					
					C	点検がきちんとき、必要に応じ修繕・修理					
					D	点検はきちんときたが、修繕・修理が不十分					
⑤安全管理・指導	安全対応能力の向上	安全意識を高め、危機回避能力、危機対応能力の向上をめざす。	学校事故、交通事故や薬物乱用等の防止教育を徹底する。	危機回避力習得のための講話、実習等で、生徒の安全意識の向上を図る。特に、自転車通学生の交通マナーを遵守させる。避難訓練については消防署等と連携して計画的に実施する。	A	危機回避の講話、実習等の実施で安全意識が向上	保護者の方へ通学路の危険箇所等についてのアンケートを実施した。それを踏まえ、市教委へ報告している。昨年度はキヌヤ横の道路工事をしてもらった。今年度は、宮山団地への道路側溝の溝蓋の配置をお願いしている。また、避難訓練については、1学期は火災、2学期は地震をそれぞれ想定した訓練を実施した。災害等で考えられる停電等も想定した対応も意識して、取組を進めているところである。多くの生徒が概ね真剣に取り組み、良好な避難態度であった。3学期は来年度に向けて浸水害を想定した避難訓練を実施する予定である。 薬物乱用防止については、保健体育の授業で扱うとともに、3年生については3学期に外部講師の方から講話をしていただく予定である。また、1年生を対象に4月に交通安全教室を行っている。講話と実技講習を行っているが、今年度は悪天候のため実技講習を中止した。全体として一人一人が安全の意識をもち登下校しているが、地域の方々から交通マナーについてご指導いただくこともあり、その都度全校に安全指導を行い、意識を高めるようにしている。	B	今年度も通学路の危険箇所の保護者アンケートの実施は、危険箇所の改善だけでなく親子での安全意識の向上につながっている。今後は、生徒から、登下校時に危険箇所が見つければすぐに報告できるような体制づくりも必要である。また、保護者アンケートの中に、生徒がたむろすると言われていた場所も加えて、保護者に知ってもらうことも考えてみてはどうだろうか。 交通安全教室が荒天により中止になったのは残念。概ね1年生は交通ルールを守って登下校しているように見えるが、学年が上がるにつれて守られていない生徒が多く見られる。全学年対象にした年1度の交通安全教室の実施を検討してほしい。 自然災害への対応マニュアルも用意されているようで安心である。訓練で得た経験がいざというときに慌てず素早く行動に移せるのが過去の災害の事例でも実証されている。一人一人が自然と適切な避難行動をとれるぐらいのしつこい実施を望む。特に日本海側における津波発生は、海岸への到達に時間的猶予が少ないようなので、マニュアルの確認と複数回の垂直避難訓練の実施を望む。 他の中学校区で不審者によるストーカー行為が発生したようだ。生徒に周知するとともに、自分が被害にあいそうな場合の対処法を示してほしい。	B	通学路の危険箇所等については、PTAの役員の方と相談しながら、どのような形で確認していくかを検討したい。また、避難訓練については、いろいろなことを想定して実施したい。 交通安全教室は警察の方からの講話など、誰もが当事者意識をもって取り組めるような工夫を関係機関と連携をして行えるようにしたい。
					B	危機回避の講話、実習等を実施					
					C	危機回避の講話、実習等を一部実施					
					D	危機回避のための講話、実習が不十分					
⑥特別支援教育	校内・特別支援体制の充実	特別支援教育の校内体制を整備し、個別の教育ニーズに対応した指導・支援を充実させる。	適切な実態把握をもとに作成した個別の指導計画及び個別の教育支援計画により、支援を充実させる。	諸検査や複数の教員での観察など実態把握を行った上で、個別の指導計画や個別の教育支援計画を作成し、遂行する。	A	個別の教育支援計画、指導計画を全職員で遂行し、成果が表れた	特別支援学級および通級指導教室利用者について個別の教育支援計画や指導計画を作成し、実行した。昨年度同様に個別の指導計画については学期ごとの評価を行い、指導改善に努めた。しかし、長期欠席の生徒については計画した内容を実施することができなかった。長期欠席をしている生徒に対して、どういった支援ができるか情報収集を行い、実施していくよう改善していきたい。また、来年度は作成後に校内支援委員会を開催し、個別の教育支援計画や指導計画の内容を吟味したり、共通理解を図ったりしていきたい。さらに、今年度支援が進まなかった要因の一つに保護者の理解が得られなかったことがある。来年度は保護者の理解をどう深めていくのかも取り組みたい。	B	特別支援学級や通級指導教室利用者の生徒を対象にした個々の支援体制や指導計画が綿密にできており、その遂行に尽力していると感じる。特別な支援が必要とされる生徒は年々増加傾向にある中で、その対応は大変だが、将来を見据えた支援を引き続きお願いしたい。 ただ、長期欠席の生徒への支援が進んでいないことは残念に思う。長期欠席の原因は、一概には言えないが学校側の対応のまずさもあったのではないだろうか。対応は大変だと思うが、各関係機関との連携を密に図り、一人でも多く学校に戻れるように対応をお願いしたい。 保護者の理解が得られない場合もあるとあった。保護者自身が我が子を支援する側なのか、実は支援を必要としている側なのか、その両方を感じる時がある。我が子の本質を理解し、学校とともに全力で支援していこうと促せるように、アンケートなどをとることも一つの手段なのではと感じる。	B	来年度も引き続き、個別の教育支援計画や個別の指導計画の作成、遂行を着実にやりたい。登校することが一概によいこととは言えない生徒もいるが、学校側の配慮で登校する可能性がある生徒に対しては支援や配慮を行っていききたい。 保護者アンケートについては検討していきたい。
					B	個別の教育支援計画・指導計画を実行した					
					C	個別の教育支援計画・指導計画を実行したが、計画の改善が必要					
					D	個別の教育支援計画・指導計画を実行しなかった					

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指	評価基準	自己評価		学校関係者評価		改善策	
						達成	状況	評価	考察		
⑥ 特別支援教育	関係機関との連携、他校との交流の推進	教育、医療、福祉等の関係機関と積極的な情報交換を行うことによって、連携を強化する。	医療、福祉等の関係機関、近隣の特別支援学校と積極的な情報交換を行う。	関係機関、近隣の特別支援学校等との定期的な連絡体制を整える。	A	各自に必要な間隔で定期的な連絡を行い、支援が充実	昨年度に引き続き、文書や受診同行によって医療との連携を図ることができた。学校の様子を医療機関へ文書で伝えたことにより、医療にとっては、保護者以外の視点で日常生活の様子を捉えることができ、服薬の調整に役立った。また、受診同行等で連携することにより、主治医の意見を取り入れた指導を行うことができた。また、特別支援学校の巡回教育相談を受け、特別支援学級の生徒に対する支援についてアドバイスをいただいた。3学期も引き続き来校していただく予定である。今年度は校区内の小学生（主に5・6年生）に対して、希望される児童・保護者を対象に特別支援学級の学級公開と説明会を行った。中学校の様子をより詳しく知っていただくよい機会となった。来年度も小学校から中学校への移行期の支援を考えていきたい。	B	関係諸機関との連携は、今までの取組が形になり、一層充実しているように感じる。受診同行や文書によって医療機関に情報提供が密にでき、生徒及び保護者に寄り添ったきめ細やかな対応をし、生徒・保護者には安心感や信頼感をもたらしたと思う。また、教員も医療機関から直接具体的な指示を得ることができ、それを指導に役立てることができたのは、生徒が学校生活を送るうえで非常に有意義なことである。特別支援学校の巡回教育相談では、生徒本人にも具体的なアドバイスをいただき、自己理解が進んだことは保護者や生徒本人にとっても意義のあることなので、今後も継続してほしい。特別支援学級について、小学校の児童、保護者の方へ情報提供となる機会を設けられたことは、関係者にとって不安解消に繋がり、とてもよい取組である。	B	医療や特別支援学校との連携については、今年度通り行っていきたい。また、本校の特別支援学級の学級公開と説明会も今年度通り行っていきたい。その上で個別相談の時間を設け、より個々の実態にあった支援を提供出来るよう、保護者や担任との連絡を密にしたい。
					B	各自に必要な間隔で定期的な連絡					
					C	学期に1回以上の連絡					
					D	連携、連絡とも不十分					
⑦ 研修	校内研修の推進	校内での研修を計画的に行い、授業力の向上に努める。そして、生徒の「つながる力」を育成する。	校内研修の充実により、「個別最適な学びの場の設定」「自分の考えを広げ、深められる協働的な学びの場の設定」「各教科のアクションプランに基づいた授業改善の取組」を実践し、授業力の向上をめざす。	校内研究の視点：授業改善アクションプランの具体的な取組 ①「めあて」「見通し」「振り返り」の効果的な提示、活用 ②「個別最適な学びの場」と「協働的な学びの場」を意識した授業づくり ③各教科の取組)をもとに授業実践を進めるとともに、校内研究授業を計画的に行い、観察シートも活用して教職員同士が学び合う機会を設ける。	A	1人1回以上の公開授業の実施により授業力が向上	半数以上の教員が公開授業を実施し、教育委員会の訪問指導も年3回受けて授業研究をすることができたが、全教員の実施はできなかった。また、教科担当者や学年部の教員、研究部員を中心として参観を行ったため、公開授業を通しての学びを全体に広げることができなかった。これにより評価を「C」としたが、「個別最適な学び」と「協働的な学び」、「ICT機器の活用」についての研修を行ったり、「協調学習」の公開授業を複数回行って研修を深めたり、ICT支援員に助言や指導を求めたりして、学校全体や教師個々での研修は進めることができた。また、校内研究の視点である「めあて」「振り返り」については、生徒の肯定的評価がそれぞれ95.2%、92.9%であり、研究授業観察シートを作成し、活用を始めることができた。次年度は、今年度の反省を生かした取組を行っていきたい。	C	昨年度までは、1人1回以上の公開授業で全教員の実施が達成できていたが、今年度は全教員で実施できなかったことは残念に思う。だが、すべての先生方を網羅する量的、面的対応も重要だと思うが、少数でも質的内容の充実が図られているように感じる。研修等で取り組むべき方向を理解した上、スキルの向上、ツールの活用も図られているように感じるので、教員それぞれの授業力向上につながったと思えるよう、さらなる充実をめざしてほしい。また、アンケートから、「めあて・振り返り」の肯定的な評価が生徒と教員と若干意識のずれがみられる。今一度再構築して教員の資質向上につなげてほしい。併せて、生徒の学びを全体に広げられるよう、タブレットで撮影をしてポイントを全体でシェアしあうなどの機会もあるとよいのではと感じる。	C	「めあて・振り返り」では、振り返りに力を入れ教員・生徒双方が次時の授業や家庭学習につながるものにしたい。よい取組を共有したり、ポイントを絞って全教員が共通の方法で行うなど研究に取り入れた。来年度は、全教員で協議する校内研究授業と個別に研究する研究授業とを明確にして計画を立て、授業研究を行いたい。協議の場では、撮影を利用したり、ポイントを絞ったりして取り組みたい。
					B	1人1回以上の公開授業を実施					
					C	公開授業を実施					
					D	公開授業を実施できなかった					
⑧ 保護者・地域住民等との連携	情報公開の推進	学校教育の内容や計画を広く情報発信する。	学校だより、学級通信等を定期的に発行し、ホームページの更新を適宜行う。	年間計画に沿って、学校だより、ホームページ等で定期的に情報を提供する。ホームページについては、載せる内容について教職員から意見をもらい充実させていく。また、メール配信システムを緊急連絡だけでなく、諸活動の案内としても有効に利用する。地域への情報発信を実施する。	A	学校だより、学級通信、HP等による有益な情報を定期的に発信	今年度も、ホームページで学校だよりと月行事予定表の定期的な更新や時間割、部活動の結果報告が概ね発信することができた。また、生徒会や各学年学級の様子については、学年だよりや学級だよりを通じて保護者に伝えることができた。全校行事や生徒会通信の配信も今後は考えていきたい。昨年度から引き続き、毎学期に作成しているPTA広報誌を民生児童委員の皆さまと校区内のコミュニティーセンターへ配付させていただいた。一斉メールでは、急な変更における対応のお願いや行事における諸連絡等を行っている。今後は紙媒体の配付を少しずつ減らして、添付資料という形でメール配信を実施していきたいと考える。	B	今年度もメールシステムの配信頻度や内容等分かりやすく配慮されていた。現行の情報発信や情報提供の状況は、各方面に対して充分機能していると感じる。ホームページも毎月更新され、充実した内容や見やすいレイアウトにより学校の様子がよく分かるようになり、色々な情報を適確に得ることができた。地域住民への発信として昨年度からPTA広報誌を校区内のコミュニティーや民生児童委員に配付した。まだ地域住民への情報発信が不十分で中学校が身近な存在ではないことが現状である。ホームページ以外にも地域住民に中学校の様子を発信する工夫を考えていただきたい。一方、保護者アンケートをみると、保護者が学校側の素晴らしい取組を知る機会や回数が減っていることから、子どもからの様子や気持ちだけを聞いて、提言や要望を記入されていると感じる。年に一度だけの強制力のある地区懇談会のような会を復活させたり、情報や様子などを伝える機会を設けたりした方がよいと感じる。	B	来年度も引き続き、学校からの情報発信を定期的に行うとともに、内容もよりよいものとなるようにしていく。また、メール配信システムの新たな活用方法がないか考えていく必要がある。
					B	学校だより、学級通信、HP等を定期的に発行・更新					
					C	学校だより、学級通信等を定期的に発行、HPは時々更新					
					D	学校だより、学級通信等を定期的に発行、HPは更新できず					

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指	評価基準	自己評価		学校関係者評価		改善策	
						達成	状況	評価	考察		
⑧ 保護者・地域住民等との連携	学校間の円滑な連携・連動の推進	異校種間の連携・連動を図り、生徒の人間力の向上をめざす。	小中高の連携・連動を密にして、学校間の円滑な連携に努める。	小中高との交流・情報交換会、授業公開を積極的に行う。また、異校種間の共通課題の克服のため保護者への啓発活動をより進める。	A	小中高の計画的な交流により連携が充実	今年度も小中のスムーズな移行のために、10月に中学校で「授業・部活動体験」を計画した。今年度はインフルエンザの流行のため授業のみの実施となり残念であったが、小学生の希望により、授業は数学と理科の2教科と特別支援学級4組の英語、5組の自立活動を行った。2月には、小学校に出向き、6年生の授業を参観することを計画している。11月に行った情報モラル講演会では、今年度も校区内の小学校6年生と本校生徒と各校の教職員がお話を聞き、共通理解したことを今後の指導につなげていった。生徒指導面の連携では、今年度も、学校警察連絡協議会での情報交換や、月例の校長会、教頭会で情報や指導事項の共有に努め、日々の指導に活かすことを続けている。中学校の特別支援学級への進学に際しては、6月、10月、1月の年3回の説明と体験を計画し、より円滑な連携、移行を目指している。また、校区内連携特別支援教育コーディネーター部会にも参加し、そこでの情報等を日ごろの指導に活かしている。	B	今年度も小中の計画的な交流が図られていると感じる。この交流があることで、小学生も保護者も進学への思いや期待が高まっていると思う。できれば、小中の交流事業の中で、短時間でも生徒たち自らが考えて交流する時間などがあると、より小学生が安心感を覚えたり中学生の自信につながったりするように感じる。近年様々な支援を必要とする子どもが増えているが、特に特別支援学級での事前見学などを実施して、その子どもが進路選択の参考になっているのは大変よい試みである。また校区内の小中連携特別支援教育コーディネーター部会で情報共有がなされているので、その成果も活かし、より充実した支援体制ができれば素晴らしい。情報モラル講演会を本校生徒、校区内小学6年生が合同受講する取組はとても有意義だと思う。ある課題に対して連携し、長く対応することにより効果は生まれると思う。また、保護者への参加の呼びかけをぜひお願いしたい。江津市内における県立高校の統合が現実化となる中、高校との連携について引き続きの取組をお願いしたい。	B	今年度行った交流を引き続き行い、生徒が考えて交流する場について考えてみたい。特別支援学級の体験では、生徒自身が計画を立てて交流することに、ぜひ取り組みたい。
					B	小中高の計画的な交流を積極的に実施					
					C	小中高の交流を実施					
					D	小中高の計画的な交流が不十分					